

嵯峨野日記
(上)

瀬戸内晴美



新潮社



嵯峨野日記 上巻

著者 瀬戸内晴美

昭和五十五年十月十五日印刷

昭和五十五年十月二十日発行

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一〇〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷所・株式会社金羊社 製本所・大口製本株式会社

© Harumi Setouchi Printed in Japan 1980

目

次

I

利休の首 11

木曾の文学寺 15

花へのいざない 23

螢 28

雨の声 32

「舞ひ姫」 36

花と風鈴 40

あたご千日詣り 45

送り火のあと 53

諧調は偽りである 57

虫しぐれ 61

Ⅱ

善光寺詣り 65

墓の表情 71

曼珠沙華など 75

秋のわかれ 79

女の呼吸 83

美しい女と着物 87

永平寺の秋 91

良書と妄念 95

ひとつの青春 99

石路の花 103

寂庵秋色 108

「貧苦菩薩」と「花びら」

112

寒村翁と京都

116

歌右衛門丈の素顔

120

終い弘法さん

124

Ⅲ

冬蕭条

131

埴輪乙女と赤い花

135

雪

139

「死出の道艸」

143

文明よ驕るなかれ

151

雪と香袋

155

モラエス、治郎八

159

Ⅳ

少女の頃と中原淳一	163
わが友、安田南	167
お水取り	171
花の種	187
護美の会	191
花と鶯	196
地獄の表情	200
女であること	204
「或る夜の出来事」	208
えんま堂狂言	212
誕生日	216

女巖窟王

220

愉しい本

224

仏頭華

228

梅雨の晴れ間

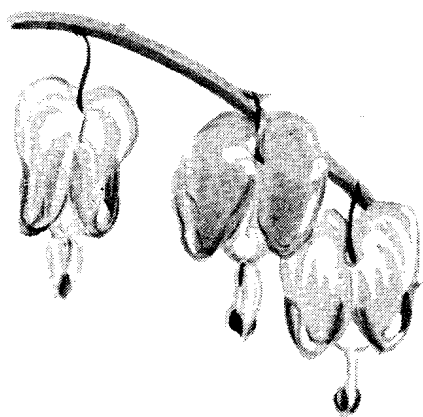
232

嗟
峨
野
日
記

上
卷

装帧·插画
横尾忠则

I
利
休
の
首



利休の首

春の終りのある宵、ふとした場所で偶然出逢った裏千家の千宗室宗匠から、今日庵へお招きを受けた。たまたま、私はその日、山本健吉氏と同席していたので、宗匠は山本氏を招かれ、私はそのお相伴をつとめる形になったのである。京都に棲んで十年になんなんとしながら、私はまだこれまで、三千家のどこへも訪れたことがなかった。つまりは縁が熟さなかったのだと思う。それでも宗室宗匠とは時折、顔をあわせ、逢えば思わず話が弾んでしまう間柄であった。

宗匠は私より一歳若い亥年で、昭和十八年の学徒出陣組である。昭和十九年の五月から私の故郷の徳島の海軍航空隊に移り、昭和二十年四月まで過されたという。私は丁度昭和十八年十月結婚し、北京へ渡っていた。若い美貌の海軍士官がどんなに情の濃い阿波女たちにもてただろうという話になると、宗匠は少し白髪のまじりはじめて、一層魅力的になった風貌に、一瞬、無邪気な子供じみた目つきをして、私にだけ通じる徳島弁をたどたどしく口にする。

「エット、エット、待ットンタンジョー」

一座の連中は、何国語ともしれぬ小鳥のさえずりのようなことばにきよんとする。エット、エットは、長いこと、長いことという方言、待ットンタンジョーは、待っていたのよという阿波弁である。若い士官が休みを得て、訪れたのにとりすがり、阿波女が情熱をこめて訴える喜びのこ

とば。死と向いあっても、青春は一度しか訪れない花の季節だ。死と向いあっていたからこそ、徳島での一年あまりの日々が、宗匠にとってはなつかしいのだろう。

さて、当日五月十四日は、前夜までの雨がからりと上り、申し分ない爽やかな五月晴になった。翌十五日の葵祭をひかえ、京都の町は何となく浮きたっている。葵祭は私の誕生日でもあって、悪い気はしない。

子供の頃、裏のお茶を習い、仕事を持つようになってからは、雑司谷の無松庵（山原鶴先生）のお弟子入りして数年通った。山原先生は、私の「田村俊子」の冒頭に出てくる俊子有縁の方で、江戸千家の流れを汲まれ、宗雲と号されている。秋井繁之介さんが心をこめて山原先生のためにつくった二畳中板台目の閑雅な茶室がなつかしく、私は、その後様々な茶室を拝見したり、招かれたりしているが、この小さな茶室ほど心が落着くところをまだ知らない。山原先生から、私はお茶の作法よりも茶の精神を叩きこまれたつもりでいる。無松庵では、世俗の匂いを極度に嫌った。人間も、道具も、話題も、世俗っぽいものは受けつけない。それは茶の精神というより、山原先生の性来の人柄のせいだろうと思われた。さて、雑司谷通いもすでに遠い昔のこととなり、お茶は我流にただ湯をわかし、茶をたて、服のよきようにのめばいいなどうそぶいてきた罰がてき面、打水の清らかな今日庵の兜門をくぐる頃は、何となく気おくれと不安で肩がこつてきた。しかし露に濡れた石畳をふみ、さみどりの苔に目を奪われ、植込みの下に熊笹の群生に、山野にわけているような気分になってきて、敷瓦に黒い竹簀子の玄関にたどりつく頃には、すっかり平常心になっていた。

私だけかと思ったら、お正客の山本健吉氏も、今日庵を訪れるのははじめてだという。

宗匠はじめ、登三子夫人も嘉代子未亡人も、たまたま、大学のストで休みだという御長男も一

家をあげてのおもてなしは、ごくじつこんな普通の家に招かれたという感じで、たちまち、私はくつろいでしまった。広い邸の中を宗匠御自身が先にたつて案内して下さり、名高いお部屋の一つ一つを説明して下さる。無色軒、又隠、今日庵、咄々斎、寒雲亭、抛拳斎、対流軒、又新、どの座敷もすばりしかったが、私が最もショックを受けたのは、御祖堂であつた。最も奥まった場所に位置するこの堂は、大徳寺山門の楼上にかかげられ、利休賜死の原因となつた利休像が安置されている。その隣りの御仏間には歴代宗匠の御位牌が並んでいる。大徳寺で得度されている現宗匠は、毎朝ここで朝の勤行をするのだと、さりげなくいわれた。利休像の前には御簾が下り、丁度首の前だけ、宇治の平等院の阿弥陀さまを拜むように、まるく御簾がくりぬかれている。そこへ宗匠が蠟燭の火をさしつけて拜ませてくれた。

灯にゆらぎ出された利休の首は、ぎよつとするほど大きく猛々しい。ビフテキの厚い血のしたたるようなのを毎朝、四、五枚もべろつとたべそうな面構えであり、大きな肉厚の口である。目も鼻も口もすべて雑作が巨きい。しかも、かつと見開かれた目の白眼が、赤く塗られている。作者の意図なのか、生前の利休の目が人の目にそう映つたのかしらない。赤目をむいた利休の顔は、口を大きくひろげ、何か今にも叫びだしそうに見える。しかし仁王のような憤怒の表情ではないのだ。満たされぬものを赤い目の奥いっばいに悶えさせた絶望と深い怨みの表情のようにも見えるし、その赤い目と、おしひろげた唇の端に、この世俗のすべてを見放した軽蔑と悲哀の表情にも見える。いずれにしろ、その巨きな顔からは、わびとか、さびとかはみじんも感じられない。私ははしたなくも奇声に近い声をあげ、いっそう御簾の方へにじりよつて利休の首と対面した。これが秀吉の怒りを買う、山門から引きずり下された後のものならまだわかる。しかし、これは利休がまだ時を得ていた時に刻まれ、山門に上げられた像なのである。それなら、すでに、利休

はその頃、自分の暗い前途を見通していたといふべきか。あるいはこの像を刻んだ男に、神意が憑き、利休の未来を知らず知らず鑿が彫り当てたといふのであろうか。

その首を受ける軀もまた、がっしりと骨太に見える巨体であった。絵像で見るとかぎり、やせて小男の秀吉が、この堂々とした体軀のエネルギーの固りのような利休にかしずかれて、次第に気が重くなるのは当然ではないだろうか。これは茶の宗匠の顔ではなく、覇者の面魂である。利休は自分のこのエネルギーにみちた軀から湧き出る野望の炎をとりしずめるため、茶道というわびに、ことさら身を沈めようとしたのではないだろうか。

軀をくぐませて入るにじり口をつくった時、利休は、天下人をはじめ高貴な人や武將をそこで這いかがまらせる快感を味ったのか、誰よりも身をがまのようにして狭き門に入る自虐にひりひりと心をひきしめたのか。私はふいに利休に手をつかまれたような気がして、肌に粟が生じた。利休をもっと識りたい。この赤目の奥にかくされた秘密をさらにのぞきこみたい。

またしても、わびの境地にふさわしくない私の煩惱が、にぎりしめた星月菩提樹の数珠じゆずを熱くしていた。